

『揚州十日記』の清末・民国期における受容

尹 敏 志

はじめに

順治二年（一六四五）四月二十五日、清軍は南明弘光政權の史可法が固守する揚州を陥落させた直後、城内の守備軍と平民を虐殺し始めた。四月三十日には封刀令を下したが、殺戮がほぼ終息したのは五月五日であった。この事件は明清交代期における有名な惨劇である。『揚州十日記』（以下『十日記』とする）を著わした王秀楚と彼の家族も籠城していたが、生き残ったのは三人だけだった。『十日記』は以後二百年にわたって刊行されず、写本の形で秘かに伝えられた。

字数は七千字足らず、流伝の範囲も限られていたが、内容が極めて刺激的なために清朝政府の注意を引いた。乾隆四十四年（一七七九）、两江総督である陸載は二十四種の違禁書籍を検出したと上奏し、翌年初にこれらすべてが禁書となったが、その中には

「『揚州十日』…抄本、無書人姓名」という記録が見える。軍機処の全燬書目にも『揚州十日録』が見えるが、やはり「不知何人所撰」と記された^③。これらは、『十日記』の早期の写本と見られる。

禁書となつてから、『十日記』は各種の明末史料叢書に収められ、次第に広まり、日本に輸出されてもいる。道光年間に刊本が初めて世に出たが、光緒年間に繰り返し刊行されて、その影響は次第に拡大した。朱新屋は辛亥革命前夜における『十日記』の閲読史を詳しく検討し、その普及には日本への留学生が関係しており、革命宣伝に重要な役割を果たしたと指摘する^④。しかし、その内容には不十分なところがあり、テキストの具体的な改編については、絵図加批本の存在などを挙げるにとどまっている。

中華民国期に至つても、『十日記』をめぐる議論は絶えなかった。一九三二年、蕭一山は『十日記』の原文を引用して清軍の残酷を指摘している^⑤。同年、謝国楨は揚州発見のイスラム教徒の碑

文が『十日記』の虐殺記録の真实性を裏づけると述べている。^⑥四年後、清朝史の研究者孟森は『十日記』を引用して、揚州の守備軍には紀律がなく、指導者であった史可法には軍事的才能が欠如していたとしたが、虐殺の真实性には触れなかった。^⑦中華人民共和国成立直後の歴史教科書にも、しばしば『十日記』は引用され、その記述を真実とみなしている。^⑧

しかし、次第に『十日記』の記述の真偽に疑問が呈されるようになった。張徳芳は、清末の反満革命に『十日記』が政治宣伝のプロパガンダに使われ、その真实性は不問に付されていたと指摘する。^⑨金宝森は、記述に矛盾があるとして、その史料価値を疑っている。^⑩A・フィナンは当時の揚州の総人口が三十万にも達していなかったのに、八十万人が殺されるはずがないとした。^⑪ただ、康熙初年に成立した計六奇『明季南略』には、揚州は高傑と清軍の殺戮を被り、「総計して前後に殺人凡そ八十万人なり」とし、乾隆初年に成立した汪有典『史外』にも「揚城の死を以て殉う者は、蓋し八十万人（八十万人の誤りだろう）」とするのをみれば、^⑬八十万人説は清代前期に広く流伝していたことがわかる。中国の学者の関心はおおよそ記述の真偽に集中し、テキスト伝承の状況に目が向けられることはなかった。

『十日記』は江戸時代の日本でも流行し、単独の写本のほか、

明末清初の著述を集めた『八家集』叢書の一部分として知識人に読まれていた。増田渉は自蔵の『八家集』写本とその一部（『十日記』と『嘉定屠城紀略』）を刊行した自修館刊本に言及している。^⑭長澤規矩也は楽亭文庫本『八家集』と自修館刊本の解題を執筆した。^⑮松枝茂夫は、宮崎八百吉・佐藤春夫訳本につぐ翻訳を出したのに加えて、『十日記』諸本を二つの系統に分類した。^⑯しかし、三氏はいずれも諸本を詳しくは調査しておらず、検討の余地がある。

『十日記』の写本・刊本流伝の全貌を把握するには、これらを徹底的に調査する必要がある。しかし、紙幅の関係上、日本における『八家集』の受容については別稿でとりあげることにして、本稿では、『十日記』の乾隆禁書以降の普及の過程をたどり、ついで、辛亥革命前後及び一九三〇年代の各種改編テキストを取り上げ、清末・民国期における『十日記』の受容の意義を探る。

① 「两江總督薩載奏江寧書局統繳應燬書籍情形摺」、中国第一歴史档案馆編『纂修四庫全書檔案』、上海古籍出版社、一九九七年、一一三六頁。

② 雷夢辰『清代各省禁書彙考』、書目文獻出版社、一九八九年、六四頁。

③ 姚觀元『清代禁燬書目四種・全燬書目』、『統修四庫全書』第九二一冊、上海古籍出版社、二〇〇二年、四三三五頁。

- ④ 朱新屋『揚州十日記』与辛亥革命——一個書籍史和閱讀史的分析、『近代史學刊』第三輯、社会科学文献出版社、二〇一五年、四五—六五頁。
- ⑤ 蕭一山『清代通史』卷上、商務印書館、一九三二年、二九〇頁。
- ⑥ 謝國楨『晚明史籍考』卷十四・抗清義師、上海古籍出版社、一九八一年、六五四頁。初版は一九三二年に国立北平圖書館が出版した。本稿では増訂本を用いる。
- ⑦ 孟森『任民育』、『明清史論著集刊』、中華書局、一九五九年、七八—八五頁。初出は一九三六年七月十六日天津『益世報』五七期である。
- ⑧ 例えば、范文瀾『中國通史簡編』（人民出版社、一九五一年、八八五頁）、呂振羽『簡明中國通史』（人民出版社、一九五五年、六三四—六三五頁）等。
- ⑨ 張德芳『揚州十日記』弁誤、『中華文史論叢』第五輯、一九六四年、三六五—三七六頁。
- ⑩ 金寶森『揚州十日記』證訛、『滿族研究』一九八九年第四期、一九一〇頁。
- ⑪ Antonia Finnane, *Speaking of Yangzhou: a Chinese city, 1650-1850*, Harvard University Asia Center, 2004, pp. 75-76.
- ⑫ 計六奇『明季南略』卷三・史可法揚州殉節、中華書局、一九八四年、二〇五頁、「揚州初被高傑屠害二次、殺人無算。及豫王至、復尺屠之。総計前後凡殺人八十萬。」
- ⑬ 汪有典『史外』卷一八・史相國伝、『四庫禁燬書叢刊』史部第二〇冊、北京出版社、一九九七年、五三二頁、「揚城之以死殉者、蓋八十八万人。」
- ⑭ 増田涉『古書雜誌（二）』、『大安』第一〇卷第一〇号、一九六四年、一七頁。
- ⑮ 『和刻本明清資料集 第一集』、汲古書院、一九七四年、五・六頁。

- 『和刻本明清資料集 第二集』、汲古書院、一九七四年、一・二頁。
- ⑮ 宮崎八百吉訳『揚州十日記 嘉定屠城紀略』、広文館、一九二二年、一頁。小寺謙吉の序によれば、翻訳の底本は『明季稗史』である。
- ⑯ 『佐藤春夫全集』第九卷・翻訳・揚州十日記、講談社、一九六八年、四四〇—四五四頁。初出は『中央公論』昭和二年十二月号で、その後昭和八年『木竹集』の「外二篇」として出版された。『荊駝逸史』によって訳出したとあるが、松枝茂夫は、実際には『明季稗史』本を底本としていると述べている。

- ⑰ 松枝茂夫訳『蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記』、平凡社、一九六五年、二三六・二三七頁。

第一章 江南における『十日記』の閲読

『十日記』が禁書となって以後、本書への言及の早い例としては、湖州帰安県人である楊鳳苞（一七五四—一八一六）のそれがある。彼は明季の野史を熟知していた人だが、弘光・隆武・永曆の南明三朝の人物の列伝である温睿臨『南疆逸史』への跋文において、百種以上の参考書を列挙し、その中に『十日記』が見える。^① 楊氏の存命中には『十日記』はまだ出版されていないので、彼が読んだのは写本である。

ところが、光緒元年（一八七五）には、四川学政である張之洞が『書目答問』に『明季稗史』十六種、二十七卷。通行本」と記して、その閲読を推奨するに至るのである。^② 『明季稗史』は、

留雲居士が編纂した『明季稗史彙編』（以下『稗史』とする）を指す。『烈皇小識』『聖安皇帝本紀』『行在陽秋』『嘉定屠城紀略』『幸存錄』『統幸存錄』『求野錄』『也是錄』『江南聞見錄』『粵游見聞』『賜姓始末』『両広紀略』『東明聞見錄』『青燐屑』『吳耿尚孔四王合伝』『十日記』の十六種の明末史料を収めるが、これらはもともと写本として江南で流布していた。紹興府人である傅以礼は、自蔵木活字本『稗史』について次のように述べている。

凡そ書十六種を載せ、郷に伝抄に励み、道光間始めて槧本有り……（中略）……時に是の書新たに出づるや、伯兄重値を以て購歸して貽られ、之を蔵すること二十余年なり。^④

朱新屋は『稗史』の初刊を咸豊・同治年間とするが、これを見れば道光年間に出版されていたことがわかる。湖南省の蔵書家である葉德輝も『稗史』活字本が道光年間に出版されたとする。傅氏は『稗史』初刊本が「坊刻に係り、脱譌甚しく夥く、且つ錯簡・闕文有りて、殊に觀覽に便ならず」というが、彼の兄が高価を以てこれを購入しているのを見れば、その人氣が窺われる。^⑦

同治四年（一八六五）十月二十日、李慈銘は同郷人の傅以礼から『稗史』を借覽し、『十日記』の印象について記している。三

年後、隣の寧波府の蔵書家である徐時棟は『行在陽秋』の写本を購入し、すでに『稗史』の中に刻されていると述べた。^⑨刊本は依然として入手しにくかったので、こうして写本が購入されたのだろう。

陳湖逸士が編纂した『荆駝逸史』（以下『逸史』とする）にも『十日記』は収録されている。道光第一次活字本五十三種・道光第二次活字本五十種があり、すべて書坊から出たもので、その編集は極めて杜撰だといふ。^⑩版式はいずれも每半葉八行、行十七字であり、著者は「無名氏」とされる。同時代に刊行された乾隆禁書には、ほかに『紀載彙編』『明季北略』『明季南略』などがあるが、編纂者・出版者はいずれも匿名であり、出版時期も明記せず、活字で組版を作って刷ったのは、出版後に組版を崩して証拠を残さないことで政府の追及を防ごうとしたからだろう。^⑪

劉乾の研究によると、嘉慶・道光年間に最も早く再刊された禁書はほぼ集部書であり、とくに前明「忠臣」の文集であるといふ。王汎森は、史部禁書の内容が龐大で禁忌に触れるところがあるために比較的遅くに再刊され、同治・光緒年間に至っても、傅以礼・李慈銘・錢綺など江南知識人ら禁書閲読のグループの言論には反清意識はほとんど見られなかったとする。ところが、道光末年に出版された蘇州人錢綺の『鈍硯卮言』には、明清交代期に触

れた次のような文章が見られる。

乱世屠戮の禍に至りては、或いは数省・一省の中に偏り、或いは一二郡に偏る。豈に屠戮に遭うの処は、皆兇人々に居り、屠戮に遭わざるの処は、皆な善人々に居らんや。則ち乱世の天道は、実に憑るべからざる者有り：（中略）：更に一説有り。屠戮の禍、一方に在ると雖も、亦た必ず此の一方の人、平日に風俗奢靡にして、天物を暴殄し、人情刁險にして、欺詐日々に生じ、里巷は則ち飲博群を成し、子弟は則ち桀驁にして制し難く、暗に死罪を犯すもの多し。^⑭

具体的な地名は記されないが、当時の読者は一見して「数省」が浙江・江蘇であり、「一二郡」が揚州・嘉定など江南の都市を指すことがわかつたはずである。このように、道光年間にはすでに虐殺の事実を江南知識人が公然と語ってもいたのである。先に言及した范鎔も、道光二十四年（一八四四）に出版した筆記に揚州の殉難者を記し、清政権の官僚を「遼官」と呼び、彼の卑劣と史可法の遺族の忠烈とを対比して、明言こそしないが、微妙な反清意識を寓している。

① 范鎔『華笑庵雜筆』卷六・楊秋室治見博聞、『范声山雜著』、民国二

十年富晋書社影印清刊本・「楊秋室風苞、字傳九、性多耿介、閉戶讀書、治見博聞、声溢大江南北。素嗜留心明季野史、瀏覽既多、藉可折衷是正、以是有「南疆逸史跋」十二篇之作。」

② 楊鳳苞『秋室跋』卷二・南疆逸史跋一、『湖州叢書』、京都大学人文科学研究所蔵光緒刊本所収。

③ 張之洞『書目答問』・史部・雜史類、光緒元年自序刊本、一〇頁。

④ 傅以礼『華延年室題跋』卷上・明季稗史彙編、『國家圖書館蔵古籍題跋叢刊』第一五冊、北京圖書館出版社、二〇〇二年、四九四・五頁、「凡載書十六種、勗勵伝抄、道光開始有槧本：（中略）：時は書新出、伯兄以重値購婦見貽、藏之二十余年矣。」

⑤ 朱新屋『揚州十日記』与辛亥革命——一個書籍史和閱讀史的分析、四九頁。

⑥ 葉德輝『書林清話』卷八・宋以來活字板、京都大学文学部蔵民国九年觀古堂刊本・「道光三年印『讀史方輿紀要』一百三十卷：（中略）：留雲居士印『明季稗史』十六種、共二十七卷。咸同間：（下略）」

⑦ 傅以礼『華延年室題跋』卷上・明季稗史彙編、四九四・四九五頁、「此書係坊刻、脱譌甚夥、且有錯簡闕文、殊不便于觀覽。」

⑧ 李慈銘『越縕堂說書記』・子部・叢書類・明季稗史彙編、上海書店、二〇一五年、八四四・八四五頁、「又復『揚州十日記』一過、悚然增溝壑性命之感。」

⑨ 『傅斯年圖書館善本古籍題跋輯録』第一冊、中央研究院歷史語言研究所、二〇〇八年、四五頁、「『行在陽秋』二卷一本、慈溪鄭芝青鈔本也。同治七年二月二十六日、城西草堂徐氏取藏、明年八月重訂。是書已刻於『明季稗史彙編』中、不知何人所錄。区区螻臂、妄自尊大、蓋其遺臣所為者。」

⑩ 謝國楨『晚明史籍考』卷三三・明季史料叢刻及書目、一〇〇八・一〇〇九頁。

⑪ 傅以礼「華延年室題跋」卷上・記載彙編、四八二頁…「記載彙編」、不知出何人手、無授梓歲月、但署「琉璃廠排字本」。就余所見、若「明季稗史彙編」「明季南北略」諸書、其標題往往如此、殆以其為桑海旧聞、未免尚有忌諱之慮。」京都大学附属図書館蔵『明季稗史彙編』の刊記は「都城琉璃廠留雲居士排字本」であり、「明季北略」「明季南略」の刊記は「都城琉璃廠半松居士排字本」である。

⑫ 劉乾「論道光年間的重刻禁書」、「文物」一九八二年第六期、六一—六七頁。

⑬ 王汎森「権力の毛細管作用…清代的思想、學術与心態」、聯經出版事業、二〇一四年、六一—六二八頁。しかし、王氏は「錢綺」を「錢琦」に誤っている。

⑭ 錢綺「鈍庵居言」・乱世天道論、京都大学人文科学研究所蔵道光十八年序刊本、「至於乱世屠戮之禍、或偏於数省一省之中、或偏於一二郡。豈遭屠戮之处、皆兇人居之、不遭屠戮之处、皆善人居之乎。則乱世天道、实有不可憑者：（中略）…更有一說焉。屠戮之禍、雖在一方、亦必此一方之人、平日風俗奢靡、暴殄天物、人情刁險、欺詐日生、里巷則飲博成群、子弟則架鷲離制、多暗犯死罪。」

⑮ 范鍇「華笑庵雜筆」卷三・揚州殉難…「揚州之難、有兵部主事何剛參、史閣部軍事死之。又江都訓導周之遠、松江人、城陷赴井死。」

⑯ 范鍇「華笑庵雜筆」卷四・史閣部弟婦事…「史公弟可經、諸生、早卒。妻李氏、為閣部夫人女弟守節：（中略）…為遼官聶三者見而艶之、思媚少宰某、強以委禽。八夫人遣人以墨漆繫進、聶啓視之、則一髮髻一耳、一鼻也、鮮血淋漓滴漿。」

第二章 『十日記』諸本の系統

『十日記』は江戸期の日本にも輸入された。単独写本としては、

早稲田大学蔵滝沢宗伯写本と東北大学附属図書館蔵写本が現存しており、他の写本はすべて『八家集』（収載書については表一を参照）叢書を写したものである。中国でも北京大学図書館蔵『八家集』清写本の存在が知られる。刊本には、文政七年（一八二四）跋の採撰亭鉄屋十兵衛木活字本・天保五年（一八三四）自修館刊本がある。

このほかに、清代の三点の明季史料叢抄も『十日記』を収録しているが、いずれも成立年代は不明である。（一）菊知氏編『明末十家集』、十四卷、中国国家図書館蔵。（二）無名氏編『明季十二家集』、十二卷、同館蔵、『明清史料叢書統編』第十五・十六冊に所収。（三）無名氏編『明季野史』、三十六卷、同館蔵、『中華再造善本』に影印。これらの収載書も表一に掲げた。

『十日記』諸本のテキストについて、松枝茂夫は『稗史』本・自修館本・内閣文庫蔵『八家集』本・『逸史』本を調査して、（一）『八家集』本・『逸史』本と（二）『稗史』本という二つの系統に分けて、（一）のほうが原本に近く、（二）は様々な人の手が加わってできあがったとしている。^①しかし、反証が存在する。例えば、『稗史』本・『逸史』本はともに五月初五日の「聞此當驚惕焉耳」で終わっているが、『八家集』本にはその後に「時為督鎮：（中略）…知言哉」という三段の跋が見える。これは正文と

表一 『八家集』『明末十家集』『明季十二家集』『明季野史』収載書目一覧

『八家集』	『東明聞見録』『行在陽秋』『粵遊見聞』『求野録』『也是録』『嘉定屠城紀略』『揚州十日記』『吳耿尚孔四王合伝』
『明末十家集』	『東明聞見録』『行在陽秋』『粵遊見聞』『也是録』『求野録』『嘉定屠城紀略』『揚州十日記』『吳耿尚孔四王合伝』『青燐屑』『幸存録』『続幸存録』
『明季十二家集』	『東明聞見録』『行在陽秋』『粵遊見聞』『揚州十日記』『嘉定屠城紀略』『吳耿尚孔四王合伝』『青燐屑』『幸存録』『続幸存録』『也是録』『毛総戎墓誌銘』『名臣節録』
『明季野史』	『入長沙記』『恩卹諸公志略』『兩広紀略』『孫愷陽先生殉城論』『孫愷陽先生前後督師略跋』『繡江集』『輜軒記事』『丙申日記』『永曆紀事』『江陵紀事』『東林紀事』『東林紀事本末論』『督師袁崇煥計斬毛文龍始末』『崇禎甲申燕都紀變実録』『甲申三月忠逆諸臣紀事』『閩游月記』『江変紀略』『殘明紀事』『粵遊見聞』『行在陽秋』『也是録』『求野録』『賜姓始末』『幸存録』『続幸存録』『四王伝』『左疏左檄』『東明聞見録』『嘉定屠城紀略』『揚州十日記』『青燐屑』『倣指南録』『続明季遺聞』

『八家集』に収録された書目をゴチックで示した。

関係せず、王秀楚の補記或いは後人の加筆と見られる。また、松枝氏が（二）のほうが原本に近いと判断したものの、結局（二）によって『十日記』を訳出したのも理解に苦しむ。^②

『稗史』本が他の諸本より詳細なのは、後人による加筆によるものなのか、それとも原型を伝えたものなのか。それを明らかにするには、諸本を対比する必要がある。ただ、諸本の文字の異同は数多く、同義字間の異同（例えば、「予」と「余」、「至」と「到」）や助辞の有無（「因」「更」「乃」）、版刻の際に生じたミス（『稗史』本の四月廿九日の「応至此此」など）は捨象して、諸本に見られる五文字以上の相違（下線は筆者による）をまとめて、表二に整理した。

これを見れば、日本の『八家集』本・滝沢本・採撰亭本・自修館本は、同じ系統に属していることがわかる。転写による相違もあるが、ほぼ一致しており、北大本と一つの底本に遡ることができそうである。滝沢本に跋がないのは、宗伯が削除したのかもしれない。『明末十家集』本・『明季十二家集』本・『明季野史』本もこの系統に属している。注意したいのは、四月廿六日の第一例について、日本の諸本がすべて「復乗高叔屋躲避」としているのに、中国の諸本が「復乗高升屋躲避」としていることである。前者では意味が通らず、「升」が「叔」の草書体に誤写されたもの

表二 『揚州十日記』諸本対照表

	『八家集』江戸時代写本（自修館本・東北大本同）	『八家集』北大本	『明末十家集』本	『明季十二家集』本	『明季野史』本	『荆駝逸史』五十三・五十種本	『明季稗史』本（『陸沈叢書』本・『揚州叢刻』本同）
四月廿五日	予知事已如此、連応曰唯唯	同左	同左	同左	同左	同左	予知事已不濟如此、然不能拂衆議、姑連応曰唯唯
	我輩休想復生人世矣	同左	同左	同左	同左	我輩休想人世矣	我輩休想復生人世矣。泣涕交下、尽出金付予。值郷人進、急呼曰「至矣、至矣！」
	両兄、一弟、一嫂、一姪、又一婦、一子、二外姨、一内弟	同左	同左	同左	同左	両兄、一嫂、一弟、一姪、又一婦、一子、一外姨、一内弟	両兄、一弟、一嫂、一姪、又一婦、一子、二外姨、一内弟
四月廿六日	復乘高叔屋躲避	復乘高 ^上 屋躲避	同左	同左	同左	同左	同左
	堆尸貯積、手足相枕	同左	同左	同左	同左	同左	堆尸貯積、手足相枕、血入水、碧赭化為五色、塘為之平
	頃之、卒仍挾婦人而去	同左	同左	同左	同左	（無）	頃之、卒仍挾婦人而去。室有仰屏、似席為之、不勝人、然緣之可以及椽。
	或父呼子、或夫覓妻	同左	同左	同左	同左	或父子子、或夫覓妻	或父呼子、或夫覓妻、呱呱之声、草畔溪間、比比皆是
四月廿八日	始釈子	同左	同左	同左	同左	同左	始釈子、尚曰：「便宜爾婦。」
四月廿九日	逃去者大半。城外亡命人利城中所有、結伴夜入官溝盤詰	同左	同左	同左	同左	逃去者力半。城外亡命人利城中所有、結伴夜入官溝盤詰	逃去者大半。旧有官溝壅塞、不能通流、至是如坦途、然亦以此反罹其鋒。城外亡命利城中所有、結伴夜入官溝盤詰
	亦有閉戸焚死者	同左	同左	同左	同左	同左	亦有閉戸焚死者。由數口至百口、一室之中、正不知積骨多少
	大約此際無撓可避、亦不能避	同左	同左	同左	同左	同左	大約此際無撓可避、亦不能避、避則一犯之、無金死、有金亦死
	予斂金尽	同左	同左	同左	同左	同左	予斂金尽、曰：「必欲金、即甘死。」
五月初二日	其落井投河、閉門焚燬者不与焉	同左	同左	同左	同左	同左	其落井投河、閉門焚燬者不与焉、被擄者不与焉
五月初五日	兄弟嫂姪婦子、親共八人、今僅存三人	同左	同左	同左	同左	兄弟嫂姪婦子、親共八人、今僅有四人	兄弟嫂姪婦子、親共八人、今僅存三人
跋	有	有	有	有	有	無	無

* 滝沢本・採撰亭本は『八家集』江戸時代写本とほぼ同じだが、滝沢本には跋がなく、採撰亭本には四月廿八日の「始釈子」を「始釈金」、四月廿九日の「予斂金尽」を「金斂金尽」とする。

であろう。

一方、『逸史』には四月廿六日の「頃之、卒仍扶婦人而去」と跋がない。冒頭では「一外姨」とし、最後のところで生存者は「四人」とするが、他本は「二外姨」「三人」とする。また、『十日記』の作者を「無名氏」とするが、他の諸本はすべて王秀楚とする。『逸史』本が他本と異なることは明らかである。

『稗史』本の記述が詳細なのは表二を見ても明らかで、これらの記述がないと文脈が分かりにくい。これが後人の加筆なのか原本の姿を伝えたものなのかは判断しがたい。しかし、他の諸本には四月廿九日「城外亡命人利城中所有、結伴夜入官溝盤詰」とするが、これは『稗史』に「溝の水が無くなっていた」とあることをふまえてようやく理解できる。これは当事者あるいは同時代人でなければ書けないことである。このため、『稗史』本のほうが原本に近く、それが伝承の過程で削りとられていって『八家集』本の形になった可能性が高い。

以上から考えると、『十日記』諸本を三つの系統に分類するほうが正しい。すなわち（甲）『八家集』本・『明末十家集』本・『明季十二家集』本・『明季野史』本の系統、（乙）『逸史』本、（丙）『稗史』本の系統である。そして、次章で述べるように、近代の諸本はほぼ（丙）から出ている。

① 松枝茂夫訳『蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記』、二三六―二四一頁。

② 松枝茂夫訳『蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記』、二四二頁。

第三章 清末革命党と『十日記』単行本

『稗史』に収録されるのはほとんど明末士大夫の紀伝・編年体の歴史書であり、崇禎及び南明政権の政治・軍事状況を記録して、その記述対象は社会上層に限られるが、『十日記』『嘉定屠城紀略』のみは清軍の下層民衆に対する暴行を書いた日記である。ことに『十日記』は個人的な経験をそのまま写して、他の『稗史』所載書に比べれば、衝撃力が強くて文章も短く、革命党から絶好の反満宣伝テキストと見られた。

辛亥革命と『十日記』のかかわりについては、前掲の朱新屋の研究がある。以下、その骨子を紹介する。朱氏はまず馮自由や魯迅の記述を引用する。横浜の華僑である馮自由の追憶には、

（史料一）興中会の初期、文人・墨士極めて欠乏を感じ、用いる所の宣伝工具、僅かに『揚州十日記』『嘉定屠城記』及び『明夷待訪録』より選録せる中の「原君」「原臣」単行本数種有り^②

とある。また、魯迅の「雜憶」には、

（史料二）他の一部の人は専ら明末遺民の著作・満州人の残暴の記録を収集に努め、東京やその他の図書館にもぐり込み、抄写しては印刷し、中国に輸入して、忘却された古き仇恨を復活させ、革命の成功を助成しようと望んだ。そこで『揚州十日記』、『嘉定屠城紀略』、『朱舜水集』、『張蒼水集』が翻刻印刷された。^③

とあり、「病後雑談の余」でも、光緒末年から清朝が忌避する内容を含む古書が相次いで翻印され、「日本に留学した学生の中の若干の者は、図書館でも革命を鼓吹するのによい明末清初の文献を探した^④」と述べている。

朱氏はこれらの記述から、辛亥革命の前夜に中国に出回っていた『十日記』は主に日本から逆輸出された翻刻本であり、次に本土の刊本であったとする。本土では、『稗史』本や『逸史』本のような叢書を介した形や、鄒容の『革命軍』のような影響力のある著作と合刊される形で広まった。また、テキストそのものに加工もされた。梁啓超が言及している案語本、陳去病が作った絵図加批本、白話本、あるいは戯曲本としても広まっていた。とは

いっても、多くは秘密裏に流布していたのだが、馮自由「野鷄大王徐敬吾」によれば、上海では公然と売られていたという。また、革命人士が『十日記』に接した経路として、①革命団体内部の流伝②学校での教育・伝播③家庭内④書店からの購入の四つの経路があったとする。そして、魯迅がなぜ『十日記』の流通に注目したのかについては、光緒帝が九代目の皇帝であり、『春秋』の「九世の仇」が重ねあわされていることを指摘する。

しかし、朱氏は史料の成立年次をほぼ無視して、光緒年間から宣統三年（一九一一）にいたる史料を整理しないままに用いており、引用が不正確で、出典にも誤りがある。例えば、先に言及した馮自由「野鷄大王徐敬吾」は次のようなものである。

（史料三）清光緒末年に在りて、凡そ上海に住みて稍久しき者は、野鷄大王其の人有所を知らざる莫し。大王の姓は徐、号は敬吾、広東香山県人なり、上海『蘇報』案の前後最も旗を揺らして呐喊する革命宣伝家なり……（中略）……大王恒に其の女公子宝妣を挈げて福州路の青蓮閣等茶館に出入し、各著名犯禁の書報を叫売し、『革命軍』『黄帝魂』『駁康有為政見書』『孫逸仙』『沈蕙』『自由血』『女界鐘』『俄羅斯大風潮』『猛回頭』『警世鐘』『揚州十日記』『孔孟心肝』『蘇報案紀

事』『三十三年落花夢』『廿世紀大舞台』等書の如き、百数十種を下らず。行人 之に趨くこと驚の若く、至つて暢銷為り。^⑤

出典は『革命逸史』初集であるのに、朱氏の注には第二集としている。^⑥しかも、傍線部は引用されていない。「光緒末年」はやや曖昧だが、『蘇報』案の前後とあることがヒントになる。

『蘇報』案は、光緒二十九年（一九〇三）に上海の『蘇報』上に章太炎や鄒容の反清民族革命論が載せられ、政府から嚴罰が下された事件である。

さらに、『革命逸史』第二集には再び徐敬吾のことが言及されている。

（史料四）癸卯一年、上海及び蘇・浙各地の革命書報業及び愛国学校最も發達の時期なり。留日学界の出版物『新広東』『湖北学生界』『漢声』『湖南』『遊学訳編』『新湖南』『江蘇』『浙江潮』等の如き、皆上海を以て尾閥と為す。滬人自ら編印を行う者は、『革命軍』及び『駁康有為政見書』を除く外、則ち『黄帝魂』『蘇報案紀事』『煊書』有り：（中略）：又た香山人徐敬吾なる者有り、専ら革命書報を出售するを以て業と為す。^⑦

癸卯年即ち光緒二十九年である。ここから、徐敬吾等が上海で『十日記』等を公然と売っていたのは、その前後のこととわかる。しかも、朱氏が引用した史料一にはまだ続きがある。

（史料五）庚子以後、東京の留学生漸く自由平等學説に濡染し、革命排滿を鼓吹する者日に衆く、『訳書彙編』『開智録』『国民報』續紛として並び起り、『湖北学生界』『浙江潮』『新湖南』『江蘇』各月刊 之に継ぎ、是れに由りて留学界の有志者と興中会の領袖と合して一爐を為す。^⑧

史料一～五の記述を整理して時系列に沿つて説明しよう。光緒二十年（一八九四）興中会が発足してから、革命党が『十日記』等禁書の単行本を宣伝武器として用いるようになった。光緒二十二年に総理衙門が学生を選抜して日本に派遣したのが、中国人日本留学の嚆矢であり、史料一の『十日記』単行本と留学生は関係ない。ただし、この頃の『十日記』単行本が中国・日本のどちらで出版されたか、祖本が何なのかは分からない。庚子事変（一九〇〇）以降、日本への留学生は革命党と連携するようになり、新聞と雑誌が次第に主要な宣伝武器となった。光緒二十九年前後、『十日記』等の書籍と留学生が刊行した雑誌が上海で公然と売ら

れるようになった。朱新屋は史料二をもとに、「辛亥時期」に中国に出回っていた『十日記』は主に日本で刊行されたものの翻刻本であるとするが、魯迅は光緒二十八年に日本に留学し、宣統元年（一九〇九）帰国したので、彼の記憶はおそらく光緒二十九年前後のことを反映しているだろう。

日本留学ブームの前に、『十日記』は既に本土に出回っていた。光緒十三年（一八八七）と二十二年に、『稗史』は上海図書集成印書局から二度鉛印されている。鉛印本巻首の尊聞閣主人序には「原書日久しくして、残欠已甚しく、魯魚亥豕は所在多く有り。茲に特に重ねて排印を加え、心を悉して校勘し、其の旧に仍りて二十七巻と為す」^⑩とあり、これが道光本の校勘翻印本だとわかる。図書集成印書局は、イギリス人であるアーネスト・メジャー（Ernest Major 一八四一—一九〇八）が租界で創立した出版社である。^⑪上海租界では清政府の管轄下にないことを利して、多くの反政府書籍・雑誌が出版された。図書集成印書局本は『稗史』を普及させただろう。例えば、章太炎は十九・二十歳の頃に『稗史』を手に入れ、当時ようやく排滿思想が盛んになったとするが、それは光緒十四・十五年にあたる。なお、光緒二十二年に魯迅・周作人兄弟の祖父が科擧不正案に巻き込まれ、杭州の監獄に入れた時に獄中に持ち込んだ書には『稗史』等があったという。^⑫

前述の通り、道光活字本は蔵書家でも入手しにくかったことを考えると、この『稗史』も図書集成印書局本である可能性が高い。

『十日記』案語本も、庚子年の前に本土で出現した。梁啓超の追憶によれば、光緒二十三年（一八九七）長沙で時務学堂に務めていた時に、譚嗣同・唐才常等が『十日記』等を案語つきで出版し、ひそかに頒布して革命思想を広め、「信奉する者は日々衆く」なったという。^⑬

『十日記』単行本が革命宣伝の武器として用いられたのは、嘉慶年間以降江南から始まった禁書重刊運動の延長線上にある。光緒十三年以降、上海租界では道光本『稗史』をもとに鉛印本を大量に出版し、一般知識人も容易に入手した。日本留学ブームの前に、『十日記』はすでに珍しいものではなくなっていたのである。

① 朱新屋『揚州十日記』与辛亥革命——個書籍史和閱讀史的分析。

② 馮自由『革命逸史』初集・革命初期之宣傳品、中華書局、一九八一年、十頁、「興中会初期、文人墨士極感欠乏、所用宣傳工具、僅有『揚州十日記』『嘉定屠城記』及選錄『明夷待訪錄』内「原君」「原臣」單行本數種。」

③ 魯迅『墳・雜憶』、『大魯迅全集』第三卷、改造社、一九三七年、二六・二七頁の訳を使用した。

④ 魯迅『且介亭雜文・病後雜談之余』、『大魯迅全集』第五卷、二二三頁。

⑤ 馮自由『革命逸史』初集・野鷄大王徐敬吾、一二三頁、「在清光緒

末年、凡住上海稍久者、莫不知有野雞大王其人。大王徐姓、号敬吾、廣東香山縣人、上海『蘇報』案前後最搖旗吶喊之革命宣伝家也：（中略）：大王恒挈其女公子宝妣出入於福州路青蓮閣等茶館、叫壳各著名犯禁之書報、如『革命軍』『黃帝魂』『駁康有為政見書』『孫逸仙』『沈蕙』『自由血』『女界鐘』『俄羅斯大風潮』『猛回頭』『警世鐘』『揚州十日記』『孔孟心肝』『蘇報案紀事』『三十三年落花夢』『廿世紀大舞台』等書、不下百數十種。行人趨之若鶩、至為暢銷。」

⑥ 朱新屋『揚州十日記』与辛亥革命——一個書籍史和閱讀史的分析、五二頁。

⑦ 馮自由『革命逸史』第二集・記上海志士与革命運動・書報業及學校之發達、七五・七六頁、癸卯一年、為上海及蘇浙各地革命書報業及愛國學校最發達之時期。留日學界出版物如『新廣東』『湖北學生界』『漢声』『湖南』『遊學記編』『新湖南』『江蘇』『浙江潮』等、皆以上海為尾閥。滬人自行編印者、除『革命軍』及『駁康有為政見書』外、則有『黃帝魂』『蘇報案紀事』『煇書』：（中略）：又有香山人徐敬吾者、專以出售革命書報為業。」

⑧ 馮自由『革命逸史』初集・革命初期之宣伝品、十一頁、「庚子以後、東京留學生漸濡染自由平等學說、鼓吹革命排滿者日衆、『訳書彙編』『開智録』『國民報』續紛並起、『湖北學生界』『浙江潮』『新湖南』

⑨ 『江蘇』各月刊繼之、由是留學界有志者与興中會領袖合為一爐。」
さねとう・けいしゅう『中國人日本留學史』、くろしお出版、一九六〇年、一五頁。

⑩ 尊聞閣主人「烈皇小識序」、『明季稗史彙編』、京都大学文学部蔵光緒十三年排印本、「原書日久、殘欠已甚、魯魚亥豕、所在多有。茲特重加排印、悉心校勘、仍其旧為二十七卷。」

⑪ 葉再生『中國近代現代出版通史』第一卷、華文出版社、二〇〇二年、二二三頁。メジャーは『申報』の創立者でもある。

⑫ 王余光・吳永貴『中國出版通史』、中國書籍出版社、二〇〇八年、二三頁。

⑬ 朱希祖「本師章太炎先生口授少年事跡筆記」、『制言』第二五期、一九三六年、「十九・二十歲時得『明季稗史』十七種、排滿思想始盛。」章氏は『幸存録』と『続幸存録』を分けて十六種を十七種とした。

⑭ 周作人『知堂乙酉文編』五十年前之杭州府獄、河北教育出版社、二〇〇二年、八二頁。

⑮ 梁啓超『清代學術概論』、文求堂、一九三八年、一四〇・一四一頁、「先是嗣同・才常等：（中略）：又竊印『明夷待訪録』『揚州十日記』等書、加以案語、秘密分布、傳播革命思想、信奉者日衆。」

第四章 日本留學生と『十日記』の改編

留學生が日本に来てから、『十日記』を読んで革命へと心を傾けた例がある。光緒二十八年（一九〇二）李書城は東京の弘文書院に在籍中、湖北の同郷の先輩から『十日記』『嘉定屠城紀略』等を読むよう勧められ、民族意識に目覚めたという。^①黄七五の記憶によると、光緒三十年に東京で、廣東籍の同級生二人から『十日記』『嘉定屠城紀略』各一冊のパンフレットを見せられ、これを読んで大きな刺激をうけたという。^②留學生中の革命家が東京で『十日記』を反滿革命の宣伝に利用していたことが確認できる。そして留學生はその内容を抜粋して、新聞と雑誌に掲載し、その流伝にさらに拍車をかけた。

東京の留学生系雑誌は政治色が濃く、ひそかに清国に輸出され、思想界が一新されたと指摘される。光緒二十九年（一九〇三）二月の『浙江潮』に揚州十日が言及され、六月の『漢声』に掲載された戯曲「揚州夢」には「十日記」の一段が使われている。同年五月、『江蘇』で連載された小説「痛定痛」には、「揚州にせよ、江陰にせよ、嘉定にせよ、城が破られた時には、一人残さず殺された」と述べる。同年第六期に、「復漢種者」が書いた「新国史略」には「揚州十日・嘉定三屠、其の惨酷、人道無きなり、吾今に至りて之を懸想臆度すれば、猶お魂之が為に戦き、心之が為に悸る」とし、「漢児」が書いた「為民族流血史可法伝」は、満州人の前に跪いている漢民族に対して「猶お揚州を記すいや」と問いかけている。^⑦「痛定痛」続第三期には、揚州十日では少なくとも二三百万人が殺されたとしている。なお、光緒三十二年、『民報』に掲載された小説「獅子吼」には「十日記」の「推尸貯積、手足相枕、血入水、碧緒化為五色、塘為之平」「或父呼子、或夫覓妻、呱呱之声、草畔溪間、比比皆是」「亦有闔戸焚死者。由數口至百口、一室之中、正不知積骨多少」といったフレーズ^⑧が見えるが、これは『稗史』本系統テキストを使っている（表二参照）。

光緒二十九年（一九〇三）、『江蘇』第六期に『陸沈叢書』の広

告が掲載された。十種の書物が収められる予定で、『建州女真考』『十日記』『嘉定屠城紀略』『忠文殉節記』の四種がまもなく刊行されることが予告された。その推薦の辞は次のようなものである。

某君亡国時の烈士・士大夫の身受目睹の著述を集め、彙めて一編と為す。毎種の首に絵図を列べ、並びに眉批を加え、或いは弁駁し、或いは引証して考據し、或いは其の義を申明し、或いは其の惨を弔唱し、語として国民の心を感じ、民族の思想を激起せざるは無く、絵図尤も人を動かすに足る。^⑩

「某君」は蘇州人陳去病であり、光緒二十九年（一九〇三）二月に日本に留学し、同年秋に帰国した。^⑪彼は同盟会のメンバーであり、南社の創立者として名高い。この推薦の辞には、『十日記』に絵図や正文へのコメントを加えることで普及を目指すとする。

『江蘇』に絵図題詞を先に掲載し、「奇冤の十日惨を嫌う休かれ、九世今に於いて繫割し来る」と述べる。朱新屋によると、「九世」とは順治から光緒に至る九代のことであり、清王朝が終わることと暗示している。章太炎も「正仇滿論」で、揚州・嘉定の恨みに対する九世復讐を主張している。^⑫しかし、朱氏は日本における九世復讐論をめぐる論戦には触れていない。

「正仇満論」の初出は光緒二十七年（一九〇一）横浜の『清議報』であり、梁啓超「中国積弱溯源論」を批判したものである。^⑭

翌年、梁氏は横浜の『新民叢報』で「或る者 動もすれば揚州十日の記、兩王入粵の事を引く。皆当時の塗毒なり。九世の仇を復さんと思うが若きは、此れ蓋し古時に文明未だ開かず、敵国相い攻めるの常なり」と章氏に反撃し、^⑮九世復讐は野蛮人のやり方とした。一方、『民報』では自爆の暗殺者である呉樾の遺書を掲載し、梁氏のことを「賊を認めて父と作すと雖も、亦た自らを知らざるに苦しむ。一旦夢より醒めれば、究に逆賊を殺し尽くして九世の仇を復さんと欲せざるもの有らざるなり」とした。^⑯このように、九世復讐論は保皇派と革命派の論点となっていたのである。陳去病的『十日記』絵図題詞で九世に言及したのは、革命党を支持したことを示している。

筆者が上海図書館で調査した絵図加批本には刊行時期は示されていないが、光緒二十九年（一九〇三）第八期の『江蘇』には、『陸沈叢書』初集四種が東京留学生会館と江西省城（南昌）教育会、上海国学社・鏡今書局・教育館、蘇州開智・知新・文瑞樓等書房で委託販売されていると述べており、それまでに出版されたことは明らかである。^⑰史料二と史料三が言及する『十日記』は絵図加批であるかもしれない。「絵図」は一点のみで、満洲兵が漢

族の平民を虐殺している姿が中央に配され、右上と左下には破壊された揚州の町と死体が描かれ、中には白骨化しているものもある。また、加批は全二十九箇所ある。いくつか例を示そう。

「牛羊を駆るかのような一言を見ると、満清が漢人を賤視してきたのは入関の時点からそうだったのである。」

吾が漢族は神聖の裔なのに東夷に制せられた。」

「満清が異族として中国に入り、犬羊の群を率いて、凶残淫殺の虐をほしきままにしたのは、胡元の漢人に対する虐待を越えている。」

「我が族類でなければ、其の心も必ず異なる。ましてや、満夷は禽獸のふるまい、豺狼のごとき心で、牙を磨き、血を吮り、漢人を吞噬したのである。異族として中華を乱し、さらに贱族の分際で貴種を乱した。満夷の逆は神人共に憤るところであり、淫虐の一端といって済むことではない。」^⑱

『陸沈叢書』初集が出版された同年の十二月に、留日経験があった林獬が上海共同租界の新開新馬路で『中国白話報』を発刊した。これは白話文による啓蒙を図ったものである。光緒二十九年（一九〇三）六月の第十七期から『十日記』の連載が始まった。

編集部は、白話訳稿を錢塘の陳軒裔先生が寄せたとし、「皆さんはこの日記を読めば、必ず切齒扼腕して満州人を恨み、この九世の不倶戴天の大仇に報いようと思うだろう」と述べる。ここにも「九世」が見える。しかし、『中国白話報』の停刊とともに白話本『十日記』の連載も終わった。

最後に絵図加批本・白話本の祖本を検討する。表二に示したとおり、絵図加批本（陸沈叢書所収）の祖本は『稗史』系のテキストに間違いはない。白話本についても、四月廿五日「我想大事已去、無法可施、只得順從衆人的意思」、四月廿八日「他才放了我、口内還說道『便宜了你的老婆』」、五月初二日「所有自己投河吊死餓死的還不在内、被擄去的也不在内」等を表二と照らし合わせれば、『稗史』本を白話にしたものと分かる。

留学生が『十日記』等を用いて革命を鼓吹したのは、庚子事変以降、とくに光緒二十九年前後のことである。留学生雑誌に掲載された『十日記』の段片と絵図加批本・白話本の祖本はいずれも『稗史』本である。九世復讐論を代表とする反満主義は横浜の『清議報』『新民叢報』と東京の『江蘇』『民報』における論戦から広がり、留学生の手を介して、上海の『陸沈叢書』『中国白話報』により一般に普及していったのである。

① 李書城「辛亥革命前後黃克強先生的革命活動」、『辛亥革命記憶録』

第一集、中華書局、一九六一年、一八〇頁、「我們与湖北早先派出的学生戡翼輩・劉成禺・程家樸等接觸後……（中略）……他們並介紹我們閱讀一些書籍、如『嘉定屠城記』『揚州十日記』及黃梨洲・顧亭林・王夫之等明末清初諸大儒的著作、遂激發起我們的民族感情。」

- ② 黃七五「重提旧事話当年」、「新華日報」、一九五六年十一月十六日、「有一天、広東同学李勤・何汝麟前来看我、手中拿著兩本小冊子、一本是『揚州十日記』、一本是『嘉定屠城紀略』。不知他們是有意無意、臨去時沒有把書帶走。我在他們走後、就翻開来看了。那知不看也罷、看了之後、簡直無法寧靜、大有『此仇不報枉為人』的動機和憤慨。」
- ③ 黃福慶「清末留日学生」、中央研究院近代史研究所、一九七五年、一八八—一九六頁。

- ④ 『浙江潮』第二期、一九〇三年、一六七頁。

- ⑤ 『漢声』第六期、一九〇三年、九七一—一〇三頁。

- ⑥ 『江蘇』第三期、一九〇三年、一二四—一二五頁、「如揚州、如江陰、如嘉定、城破的時候、無不被殺一空。」

- ⑦ 『江蘇』第六期、一九〇三年、五四・七二頁、「揚州十日・嘉定三屠、其慘酷無人道、吾至今懸想應度之、猶魂為之戰、心為之悸。」爾含垢忍恥、屈膝於滿人之下、其猶記揚州否。」

- ⑧ 『江蘇』第六期、一一頁、「揚州城破了以後、被賊鞭子殺了十日、城中原有的居民、連外府外縣避難入城的、不下二三百萬、殺得一箇乾乾淨淨。」

- ⑨ 『民報』第四号、一九〇六年、一四一—一四四頁。

- ⑩ 『江蘇』第六期、一九〇三年、一二二—一二三頁の間、「某君集亡国烈士・士大夫身受目睹之著述、彙為一編。每種首列絵図、並加眉批、或弁駁、或引証考據、或申明其義、或弔唁其慘、無語不感冤国民之心、激起民族之思想、絵図尤足動人。」

- ⑪ 『陳去病年譜』、張夷主編『陳去病年譜』第六冊、上海古籍出版社、

二〇〇九年、三一—四〇頁。

⑫ 『江蘇』第六期、一九〇三年、一四一頁、「板蕩無城劇可哀、蒸黎百萬尽成灰。奇冤十日休嫌慘、九世於今繫割來。」

⑬ 朱新屋『揚州十日記』与辛亥革命——一個書籍史和閱讀史的分析、五七頁。

⑭ 小林武「章炳麟『扈書』と明治思潮——西洋近代思想との関連で——」、『日本中国学会報』第五五集、二〇〇三年、二〇四頁。

⑮ 『新民叢報』第一六号、飲冰室師友論學牋、一九〇二年、六七頁、「或者動引揚州十日之記、阿王入粵之事、皆當時之塗毒。若思復九世之仇者、此蓋古時文明未開、敵國相攻之常。」

⑯ 『民報』臨時增刊・吳樾遺書、一九〇七年、二頁「雖認賊作父、亦苦于不自知。一旦夢醒、究未有不欲殺尽逆賊、而復九世之仇也。」

⑰ 『江蘇』第八期、一九〇三年、十八と十九頁の間。

⑱ 『揚州十日記』、『陸沈叢書』、上海圖書館藏光緒二十九年石印本、「吾親如驅牛羊一言、而知滿清賤視漢人、自入関之初已然矣。吾漢族以神聖之裔、乃見制東夷。」(四頁)「若滿清以異族入中国、率犬羊之群、逞其凶殘淫殺之虐、以視胡元之虐、遇漢人有過之無不及。」(七頁)「蓋非我族類、其心必異。況滿夷以禽獸之行、豺狼其心、磨牙吮血、以吞噬漢人耶。既以異族乱中華、復以賤族乱貴種。滿夷之逆、神人共憤矣、豈僅淫虐之一端哉。」(九・十頁)

⑲ 趙林「晚清啓蒙運動的媒介鏡像与認同困境——從『杭州白話報』到『中国白話報』」、「中国現代文学叢刊」二〇一三年第二期、一七三—一八五頁。

⑳ 『中国白話報』第十七期・來稿、一九〇四年、四〇・四一頁、「我想列位看了這部日記、必定咬牙切齒痛恨滿州人、想報這九世不共戴天的大仇。」

㉑ 『中国白話報』第十八期・來稿、四一頁。

㉒ 『中国白話報』第二十期・來稿、三六頁。

㉓ 『中国白話報』第二十二三四期・來稿、一〇三頁。

第五章 辛亥革命後の変化

辛亥革命が成功してから、『十日記』の人氣は落ちた。民国初年に北京で学生生活を送っていた周予同によれば、若者たちは『十日記』等のかわりに、ビョートル・クロポトキン等無政府主義者の著作を愛読するようになったという。^①一九三〇年から一九三四年にかけて、陳恒和は『揚州叢刻』を出版し、その第七種が『十日記』である(表二に示したように「稗史」本を底本としている)が、伝統的な木版印刷により出版された『揚州叢刻』は、その印刷量も多くはなかっただろう。

一九三六年、上海共同租界の河南路にあった神州国光社^②は『国内乱外禍歴史叢書』を出版し、『十日記』を収録した。神州国光社は光緒末年に鄧実・黄節等の革命党が創立し、多くの反清書籍を出版した。神州本『十日記』の巻末に編纂者「剣心」は次のように記した。

旧鈔本に澄江の趙曦明の跋有りて云う、『十日記』は乃ち揚人身に親歷する所の事にして、其の洗城と誤伝せる一段を觀

れば、則ち尚お洗城にあらざるなり、而るに慘烈已に此くの如し！彼の太平の世に生まれ、而るに生成の徳を感じるを知らざる者は、豈に復た人心有らん？」と。

書中の簡浄処・詳悉処頗る刊本に勝れる者有り、是れ趙氏の改定せる所なるや否やを知らず。今據りて改めて以て流伝を広む。鈔本の後跋無く、尊聞閣刊本に亦た之れ無きに苦しみ、別に旧刊本に據りて録入す。^③

趙曦明（一七〇四—一七八七）、字は敬夫、常州府江陰県人である。松枝氏は、趙曦明の跋が疑わしく、神州本は大筋において『稗史』本と同じものであり、さらに加筆があると指摘したものの、具体的な例を挙げていない。^④確かに、「剣心」は趙曦明跋本の来源（所蔵地等）を述べておらず、底本が実際に存在したという確証はない。しかも、神州本は『稗史』本より記述が詳細なところが多い。いくつか例を挙げよう。

（一）『稗史』四月廿七日条では「敵兵入城無疑矣」と「而大兵入城之語」「大兵殺人声」というように、「敵兵」「大兵」を混用しているが、神州本ではすべて「敵兵」となっている。

（二）『稗史』四月廿七日条「至午後、積尸如山、殺掠更甚。

幸至晩、予等遂巡走出」を、神州本は「日向午、殺掠愈甚、積尸愈多、耳所難聞、目不忍睹、婦乃悔疇昔之夜、誤予言未死也。然幸獲至夕、予等遂巡走出」とする。

（三）『稗史』四月廿八日「破櫃劫嫗去、捶擊百端、卒不供出一人、予甚德之」を、神州本は「破櫃劫嫗去、捶擊百端、卒不供出一人、予甚德之。後仲兄產白金、予所留余亦數十金、並付嫗、感此也」とする。

（四）『稗史』本五月初一日「忽見一人、紅衣佩劍、滿帽皂靴、年不及三十、姿容俊爽。隨從一人、衣黃背甲、貌亦魁梧。後有揚州數人跟隨。紅衣人熟視予曰：『視爾非若儔輩中、実言何等。』」予念時有以措大而獲免者、有以措大而立斃者、不敢吐実、飾詞以告。復指諸婦子問是誰、具告以実。紅衣人曰：『明日王爺下令封刀、汝等得生矣。』命隨人付衣幾件、又金一錠、問：『汝等幾日不食？』予答以五日矣。命：『跟我來。』予与婦且信且疑、不敢不行。至一宅、所蓄甚富、魚米充盈、向一婦人曰：『你好好待此四人。』与予別去」を、神州本は「忽見一人、紅衣佩劍、滿帽皂靴、年不及三十、姿容俊爽。隨從一人、衣黃背甲、貌亦魁梧。後有數南人負重追隨。紅衣者熟視予、指而問曰：『視予、爾非若儔輩、実言何等。』予念時有以措大而獲全者、亦有以措大而立斃者、不敢

不以実告。紅衣者遂大笑謂黃衣者曰…『汝服否？吾固知此蜜子非常等人也。』復指洪嫗及予問為誰、具告之。紅衣者曰…『明日王爺下令封刀、汝等得生矣。幸勿自斃。』命隨人付衣幾件、金一錠、問…『汝等幾日不食？』予答以五日、則曰…『隨我来。』予与婦且行且疑、又不敢不行。行至一宅、室雖小而質蓄甚富、魚米充牣、中一老嫗、一子方十二三歲、見衆至、駭甚、哀号触地。紅衣者曰…『予貸汝命、汝為我待此四人者、否則殺汝。汝此子当付我去。』遂挈其子、与予作別而去」とする。

(一) について、家族の半分を殺された王秀楚が清軍を「敵兵」と呼ぶのは納得できる。^⑤ おそらく、原稿が「敵兵」としていたのを、転写者が「大兵」に改竄したものの徹底できなかったのだろう。(二) については、四月廿六日条の末の「婦欲寛死、予竟夜与語、不得閑」、即ち王秀楚の妻が自殺しようとしたが、王秀楚の勸説のために結局諦めたという経緯に合う。(三) については、神州本から、王秀楚と彼の仲兄が家族の命を救った洪嫗に大金を出して謝意を表したことがわかる。(四) の「紅衣人」と呼ばれる清軍将領は、神州本では王秀楚とその家族に食べさせなければ殺すと老嫗を脅し、強引にその子を奪ったことが記されて

おり、征服者の威圧性がより前面に出ている。王秀楚のことを「蜜子」と呼んでいることも含めて、描写が生動しているといつてよいだろう。

『中国内乱外禍歴史叢書』の「内乱外禍」には、当時の国共内戦と日本の進出が意識されているだろう。その出版予告によると、「国難が日び亟るのに鑑みて、時代の需求に応じるために」出版するとある。一九三五年に華北分離工作が起こり、日本の勢力圏下に置かれた察哈爾省の張家口で発行された『察省国民新報』に「読（揚州十日記）後」が掲載され、国民に「早く目覚めよ、この四面楚歌の環境を見れば、恥ずかしげもなく自己の利益を求めている場合ではなく、自己を整頓し、精神を展開し、亡国の悲劇を繰り返さぬようにしなければならぬ！」^⑦ と呼びかけた。一九四〇年に杭州で刊行された『戦時中学生』にも「十日記」原文の断片（祖本不明）を載せ、その附語には、

揚州の民衆で殺されたのは八十余万であり、すべて自ら首を差し伸べて殺されるままになり、少しも抵抗しなかった。もしも日ごろから少しでも組織があれば、どうしてこのような状況に至ろうか。ここからも、民衆の組織、民衆の武力の重要さがわかる。^⑧

とある。辛亥革命の後『十日記』の人氣は下火になったが、一九三〇年代後半に人氣が再燃したのである。このような例はほかにもあった。例えば、一九三七年以降、乾隆禁書の作者である夏允彝・完淳の父子の抗清事跡も中国の新聞・雑誌に繰り返し掲載されている。当時の中国知識人は現実と明末清初の歴史を関連づけていたのである。^⑨

- ① 周予同「過去の『五四』」、「中学生」第五号、一九三〇年、三頁、「青年們在辛亥革命之後、不看『揚州十日記』等小冊子、而看克洛泡特金、托爾斯泰的著作。」

- ② 「1935年上海市書店調査」、汪耀華編『上海書業名録（1906-2010）』上海書店、二〇一一年、三四頁。

- ③ 『揚州十日記』、神州国光社、一九三六年、二四五頁、「旧鈔本有澄江趙曦明跋云…『十日記』乃揚人身所親歷之事、觀其誤伝洗城一段、則尚非洗城也、而慘烈已如此矣！彼生太平之世、而不知感生成之德者、豈復有人心哉？」書中簡淨處・詳悉處、頗有勝刊本者、不知是趙氏所改定否？今據改以広流伝。苦鈔本無後跋、尊聞閣刊本亦無之、別據旧刊本録入焉。」

- ④ 松枝茂夫訳『蜀碧・嘉定屠城紀略・揚州十日記』、二四〇頁。

- ⑤ 「大兵」は清側に立った言い方である。謝貴安は、屈大均等遺民の著作の原稿では清兵を「大兵」と言わず、それが「大兵」とされたのは後人の改竄であると指摘する。（『安龍逸史』考論、『史學史研究』二〇一六年第三期、一一・一二頁）

- ⑥ 『圖書展望』第一卷第八期、一九三六年、七三頁、「鑑於國難日亟、為応時代需求、最近程演生・李季・王独清等三人主編『中国内乱外患

「禍」歴史叢書「一種。」

- ⑦ 『察省国民新報』、一九三六年九月二十三日、四版、「趕快清醒、看這四面楚歌的環境、不要再當營苟苟、應當整頓自己、展開精神、免得再演亡國的悲劇！」

- ⑧ 『戦時中学生』第二卷第一期、一九四〇年、一四五頁、「揚州民衆之被屠殺者共八十餘万口、皆伸頸就戮、毫無抵抗。使平日稍有組織、何至於此。從此也更可見民衆組織、民衆武力之重要。」

- ⑨ 孫慧敏「書写忠烈…明末夏允彝・夏完淳父子殉節故事的形成与流伝」、「台大歷史學報」第二六期、二〇〇〇年、二九九頁。

おわりに

本稿では、中国における『十日記』の流伝・出版を乾隆年間から中日戦争期まで見てきた。最後にその全体像を確認しておく。

『十日記』の成立時期は不明だが、写本の形でひそかに流布した。乾隆四十五年（一七八〇）に禁燬された時、「無書人姓名」あるいは「不知何人所撰」と登録され、作者が王秀楚であるかどうか判断できない。清代の文字獄と禁書の圧力の影響下、そのテキストは保存者・抄写者によって改竄されつつ多くの明末史料叢書に収録され、道光年間に至ってはじめて書肆から木活字本を以て『稗史』と『逸史』の一部として出版された。

『十日記』は日本にも舶載され、清国と日本においてそれぞれ写本から刊本へという変化過程をたどったが、その経緯は相違し

ている。日本の場合ほぼ単線的な進化であり、現存する『八家集』諸写本は同じ底本から出ており、自修館本もその系統に属する。清国の状況は比較的複雑であった。(甲)『八家集』本・『明末十家集』本・『明季十二家集』本・『明季野史』本の系統(日本の『八家集』諸写本・刊本と同じ種類に属している)、(乙)『逸史』本の系統、(丙)『稗史』本の系統、(丁)神州国光社鉛印本の四種があるが、道光年間以降に優勢であったのは(丙)である。光緒十三年と二十二年に、上海租界にあった圖書集成印書局は二度『稗史』を鉛印し、『十日記』の入手を容易にした。さらに、辛亥革命の前夜に中国留学生と革命党が東京で『漢声』『江蘇』『民報』などの新聞・雑誌にその断片を掲載し、絵図加批本・白

話本の形で出版され、革命の宣伝道具となった。

辛亥革命の後、『十日記』の人氣が落ち込んだ。ところが、一九三六年に神州国光社が『中国内乱外禍歴史叢書』を刊行し、その中に『十日記』も収録された。『十日記』諸本の中で、神州本の記述が最も詳しいが、底本の真贋は判断できない。その後、日本との対立のなかで、中国側の新聞と雑誌には、『揚州十日』を繰り返しはならないとの警鐘がしばしば鳴らされた。『十日記』の流伝と受容史はそれぞれの時代状況を反映しているのである。

(京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

The Reception of *A Record of Ten Days in Yangzhou*
During Late Qing Dynasty and Early Republican China

by

YIN Minzhi

On the 25th day of the fourth month of the Shunzhi reign (1645), after the fall of Yangzhou 揚州, the Qing army began to massacre the soldiers and civilians in the city, and the slaughter lasted until May 5. This incident, known as Ten Days in Yangzhou 揚州十日, was a famous tragedy of the Ming-Qing transition. Wang Xiuchu 王秀楚, who wrote *A Record of Ten Days in Yangzhou* 揚州十日記, and his family were caught up in the siege, and only three of them survived. Less than 7000 characters, this book was secretly handed down in the form of handwritten copies for over 100 years, so the scope of its circulation was limited. However, because of its extremely provocative content, *A Record of Ten Days in Yangzhou* was banned in 1780 by the Qianlong 乾隆 emperor.

With the end of the book prohibition movement of the Qianlong era, handwritten copies of *A Record of Ten Days in Yangzhou* first reappeared in the Jiangnan area. During the Daoguang 道光 (1821-1850) era, it was

published in a wooden-type edition, compiled as a part of book series titled *Mingji Baishi* 明季稗史 and *Jingtu Yishi* 荆駝逸史. After 1887, the Tushu Jicheng Yinshuju 圖書集成印書局, located in Shanghai's foreign concession 上海租界, republished a large number of a stereotype edition of *A Record of Ten Days in Yangzhou*, which was based on the Daoguang edition. As a result, the book became easily accessible to the general public. Around 1903, Chinese students in Japan used *A Record of Ten Days in Yangzhou* to promote the national revolution. At the same time, Anti-Manchuism, represented by the ideology of taking revenge down to the ninth generation 九世復讐論, was also popularized by Chinese students in Japan through the versions in Luchen Congshu 陸沈叢書 and the *Chinese Vernacular Journal* 中國白話報 published in Shanghai. After the Revolution in 1911 辛亥革命, the popularity of *A Record of Ten Days in Yangzhou* declined, but reemerged in the late 1930s amidst the Sino-Japanese conflict. The transmission and reception history of *A Record of Ten Days in Yangzhou* reflects the conditions of each era.

Key Words; *A Record of Ten Days in Yangzhou*,
Ming-Qing Transition; Prohibited Books ;
The Revolution of 1911; late 1930s